

## 「多文化共生社会」に潜む危うさ

黒田 成彦

皆さんもご存じかと思いますが、改めて「文明」と「文化」の違いを申し上げます。

「文明」は英語で civilization と表され、その語源は「市民化・都市化」という意味があります。一方「文化」は英語で culture と表され、その語源は「耕す」という意味があります。つまり「文明」は、人々が集まって利便性や実用性を追求することによって豊かさが広がっていく社会を描くことができます。また「文化」は、その土地に根差した暮らしや知恵などを掘り下げていく蓄積した価値が思い浮かびます。耕していくのは、自分自身の考えや生き様、そしてその地域ならではの歴史や特性であり、それらを長い時間をかけて誇りあるものにしていく活動ではないでしょうか。

標題の「多文化共生社会」とは、国籍、民族等の異なる人々が互いに文化的背景などの違いを認め、人権を尊重し合いながら地域社会の対等な構成員として共に生きる社会のことを表します。これは世界規模でグローバル化が進み、一方で日本では人口減少などによって労働力不足が指摘され、外国人の協力を得なければ成り立たなくなる産業側のニーズなどを反映して、政府や各都道府県においても共有されているスローガンです。

ではなぜ私が、その「多文化共生社会」に危うさが潜んでいると思うかを述べたいと思います。

まず、ほとんどの文化の背景には宗教が存在します。宗教の教えやしきたりなどが生活する上での規範を形成することが多いからです。先の8月25日に行われた大分県日出町の町長選挙において前町議の安部徹也氏が、現職町長に大差で勝利しました。その主な争点の一つにイスラム教の墓地の問題があったそうです。イスラム教では火葬が禁忌となっており、町有地に土葬墓地を建設する計画を4年以上前から町とイスラム教会関係団体側が交渉を続けていたようですが、水質汚染を懸念する住民の不安を受け、墓地建設の許可手続きの不透明さを指摘してきた安部氏は、当選翌日の記者会見で「売却を許可しない予定で考えている」と答えています。県内でも、イスラム教の信者を採用する企業は、食事の際の食材の選定やラマダン（断食）の設定、礼拝堂の設置など、考慮しなければならない状況もあるようですが、異教徒の墓地の問題が九州内の身近な自治体にも存在していたことに驚きました。

またかねてより、埼玉県川口市においては、多くのクルド人が居住することによって様々な問題が起こっていることを聞きます。このような現状において、「多文化共生社会」は本当に実現できるのでしょうか。

異文化の衝突については、国境の有無に関係なく私たちも身近な問題として経験しています。例えば「夫婦のあり方」です。違った家庭に生まれた男女が恋愛をし、結婚して家庭生活を営んでいく上で様々な意見の食い違いが生じます。これは正に異文化の衝突だといえます。その衝突から争いを回避していくには、話し合いと譲り合いなど相互理解が不可欠です。これは地域社会においても同様です。「郷に入っては郷に従え」という諺があるように、新しくその地域に住む人は、その地域に根差した一定のルールに従わなければ「村八分」のような扱いを受けることにもなりかねません。孤立しないた

めには、その地域の文化に溶け込む姿勢が大事だと思います。

世界各国の状況を見ますと、移民の受け入れについては、米国のトランプ前大統領がメキシコ国境にフェンスを造ることなどを公約に掲げたり、一方EU諸国では比較的簡単に国境移動ができることなどから移民のトラブルが顕著になっているようです。従って世界的にも「多文化共生社会」の成功事例はあまり見受けられないような感じがします。

冒頭に文化の言葉の根源は「耕す」と述べました。英語で「cultivate」ですが、この意味のラテン語の接頭語は、「colo」だそうです。つまり、自分の思考を耕すことや住んでいる地域の価値を掘り下げることが文化的活動となるのですが、他人の土地や価値観に鋤を入れ耕す行為は「colonization」＝植民地化ともいえます。これは20世紀における人類の愚かな行為として反省しなければならないことは言うまでもありません。

私は、宗教や民族によって差別があってはならないと思いますし、そのようなことは厳に慎まなければならないと考えます。そして相互理解を促していくことこそが、成熟した地域社会に必要なものであると信じています。

そこで私が抱く「危うさ」とは、日本国民の宗教の理解度のことです。現在の教育現場では宗教の中身について詳しく教えていません。自国の神道や仏教についても、それほど理解が進んでいるとは言えない状況です。秋にハロウィーンで盛り上がり、年末はクリスマスとお寺の除夜の鐘、年が明けたら神社参拝に出掛ける日本人の行動原理を、自分たちがどれだけ理解し、その様子を外国の人たちはどのように見ているのでしょうか。日本人は神道によって多神教の価値が根差しており、宗教に対して大らかです。でもそのことが一神教の外国人にとっては不信感につながることもあるのです。

従って、様々な文化が共生していく空間を形成するには、まずはお互いの文化を理解し、その違いを認めることから始めなければなりません。譲れる部分と譲れない部分があることは、話し合いながら妥協点を探すことも大事でしょう。そうした手続きや過程を行政が設定する必要性も今後顕在してくるかもしれません。

そして最後に、文化や民族で差別することはあてはりませんが、「国籍で区別することは差別ではない」ということは国際常識として知っておくべきです。

おわり